

報 告

〈場〉もしくは〈運動体〉としての展覧会の試み

— 絵画の場合2007年報告 —

林 亨 (北方圏生活福祉研究所・北翔大学短期大学部)

抄 録

絵画はこれまで、人間にとって最も身近でなじみのある美術表現だったが、視覚世界が多様化し、これまで担ってきた絵画の役割が限定的になってきているように思われる。「絵画の場合」は、新たな絵画表現を提示する展覧会を中心に、参加作家同士による絵画についての議論とその公開、鑑賞者を巻き込むパフォーマンスコラボレーション、ワークショップ、ギャラリートークなどの作品展示以外の様々な活動を通して、絵画の役割を見直し、その有り様を再定義するべく、様々な立場から集う「場」をつくり、新たな提案をする「運動体」となって、有意な実例を多数提示した。さらに、展覧会の鑑賞者アンケートの結果を分析することによって、実際に鑑賞者にどのような反応があったか把握した。本稿は、それらの内容を示したものである。

キーワード：絵画，場，運動体，展覧会，鑑賞者

I. はじめに

本稿は、共同研究「美術と社会の連動の試み—北海道の現代絵画の場合—」の一環としてまとめるものである。この研究テーマは、美術作品、とりわけ現代絵画が、変転し、多様化し続ける社会や現代美術の世界で、どのように位置づけられるかを考察することである。すなわち、作家と鑑賞者が直接にコミュニケーションをする場を持つことで、現代絵画が鑑賞者の生活や公共の場にいかにか深く入り込めるか、また、いかに広い層にアピールできるかを問いながら、現代絵画が、社会において、また、個人の生活の場において、身近な存在として、あるいは豊かな情操発信物として、人間のQOL向上にどう寄与するかを、表現研究や展覧会、ワークショップなどの実践を通して示すことである。

「絵画の場合」は、筆者が実行委員長となって2004年設立された団体であり、基本的には本研究とは別の独立した立場にあるが、前プロジェクト（2001年から2005年までの学術フロンティア美術プロジェクト）の研究協力団体として、共同研究を実施してきた経緯もあって、昨年から本研究の中心的な協力団体となっている。本研究の実践報告としてこの「絵画の場合2007」を取り上げ、まとめることによって、今後の本研究の指針を提示したい。

II. 「絵画の場合」のこれまでの展開

1. 「絵画の場合」の意味するもの

「絵画の場合」というのは、単なる展覧会のタイトルではなく、絵画について考えるための「場」あるいは「運動体」の総称と考えている。今回の展覧会を含めて、これまで3回の展覧会を実施してきたが、いずれの案内状にも、その内容や意義について紹介する文章^(註1)が書かれている。そこで共通して述べられているのは「絵画の可能性」を追求する信念である。その強い信念がこの「運動体」の出発点といえる。美術作家とボランティアスタッフによるこの「運動体」は、絵画についての議論を様々な形で実施しながら新しい絵画表現を模索する展覧会と、絵画の受容者の創造性をいかに喚起し、日常への浸透をはかるか実験するイベント群という大きな二つの「場」に、表現者、研究者、鑑賞者など様々な立場の人間が集うように期待し展開されてきた。

2. 運動体「絵画の場合」が出来るまでの経緯

最初の展覧会は2004年に開催したが、そもそもの始まりは、「絵画のあり方について真正面から考えるグループ展を作りたい。絵画がもっと社会と関わる方法はない

か。」という筆者のこだわりからだったが、実質的な始まりは、筆者の友人であった美術作家で札幌デザイナー学院教員の渋谷俊彦氏に相談してからである。「グループで展覧会をやる意義はなにか?」「形式を問うことに意味があるのか?」「社会との連動作業に作家は関わるべきなのか?」「今考えるべき〈絵画〉とは何か?」というような根本的議論を繰り返しながら、およそ2年をかけて、グループ展を作ろうというエネルギーをふくらませていった。そして、渋谷氏を含む7人の作家の賛同を得て、さらに、「絵画(美術)と社会の連動」の活動の中心となっていく北海道大学教員の堀田真紀子氏と北海道新聞記者の梁井朗氏に加わってもらい、最初のメンバー10人で第1回目の展覧会を開催することになった。展覧会と同時に「無料レンタルプロジェクト」^(注2)を含む関連イベントも実施したが、まだ試行錯誤の段階であった。

2005年の第2回展では、美術館の学芸員の穂積利明氏が加わり、絵画についての議論が主にソーシャルネットワークワーキング(SNS)の「mixi」場で行われ、白熱した。また、「社会との連動」に関するイベントが「アートピアプロジェクト」として大きな広がりを見せた。作家も数名入れ替わったが、当初の目論見が実を結んだような、充実した展開となっていった。

第2回展の後に、メンバー間の意見の違いから運営面の混乱をきたし、2006年の開催を見送ることになり、一時は次回開催のめどが立たなくなった。しかし、今回の第3回展が開催できたのは、「絵画の可能性」を追求する「場」として、曲がりなりにもまだ存在価値があり、また、札幌に、そういう「場」を求める人々のエネルギーがあるからだと思っている。

Ⅲ. 今回の展覧会の内容

1. 基本的な意図

2004年展では、絵画について考える展覧会として、メンバーによる様々な形の議論と、2回のギャラリートーク、そして、社会との連動の試みとして、無料で絵画作品を貸し出し自宅などに展示してもらい鑑賞者にその状況を報告してもらおうという「レンタルプロジェクト」を実施した。前回の2005年展では、さらにそれぞれを深めるかたちで、絵画をめぐる議論を、mixi上で行い、それを記録に残し鑑賞者に提示したり、議論に参加してもらったりした。社会との連動については、当時、武蔵野美術大学の学生だった升田智美氏らが加わり、札幌市内の飲食店に絵画作品を印刷したトレイや箸入れを置かせてもらい、利用者の反応をみる「トレイプロジェクト」

など、絵画を社会へ浸透させる沢山の試みが実践された。

昨年、社会との連動に関する活動が、NPO札幌アーティストギャラリー設立という大きな流れとなって動いたこともあって、今回は、作品展示を中心に据えた内容にすることで各作家が合意していた。これまで同様に、「絵画」についての議論は続けていきながら、一方で社会との連動の動きは各作家個人にその内容は任すようにした。

今回参加の10名の作家に共通していることは、「マスターリー」へのこだわりを再認識しようとしている点だと考えている。「マスターリー」は単なる「技法」ではなく、「表現を芸術として成立させるための熟練した技能・技量」と、とらえるべきで、現代の絵画作家に求められる「マスターリー」というものは、3次元の視覚世界を2次元映像として再現し定着させるもの、いわゆる写実的描写力だけではないし、ましてや工芸的技法の熟練技でもない。いうなれば、「絵画」という「文脈」で何が表現できるか新たな見せ方を追求することであり、また、その「文脈」そのものを新たに見せることではないかと考えている。これまで「絵画の場合」が行ってきた「議論」や「ギャラリートーク」、そして、前回の「アリアンスフランセーズ展」^(注3)では、作家のこだわりの言葉を提示し、作品の成立過程を垣間見せることを意図した。それによって作者の内面の葛藤や迷い、目論見をさらけ出すことになり、マスターリーを見直し、新たなマスターリーを獲得するための検証をしてきたといえる。今回の展覧会でも、作家がそれぞれ原点に立ち帰り、このマスターリーへの問題意識を強く持ち、またそれぞれのアプローチで各作家自身のマスターリーを再検討し、さらに鑑賞者と共有しながら考えていくということに大きな意義があると考えている。

2. 複数会場での実施

今回の展覧会のもう一つの特徴に、複数会場での開催ということがある。これには、まずは展示作品数を増やしたいという意図があり、さらに、場所によって作品の見え方がどのように変化するかも感じ取ってほしかった。しかしながら最大の意図は、一会場の展覧会ではなく地域社会から発信するかたちにして、鑑賞者が実際に移動することによって、地域の雰囲気を感じながら絵画について考えてもらうことである。

ただし、今回は完全に会期を同じに出来なかったことから、その意図は十分に浸透しなかったかもしれない。会期が会場ごとにずれていたことで、混乱した部分もあったのは事実である。しかしながら、メイン会場となったポルトギャラリーでは、作品数を調整できたことで、ゆったりとした展示空間になった。

3. 参加作家紹介

安藤文絵氏(写真1)は、第1回展からの参加で、今回は、次章で紹介するワークショップとともに、鑑賞者とのコラボレーションを一番強く意識した作品を出品した。線をモチーフに、安藤氏の友人が描いたという線を

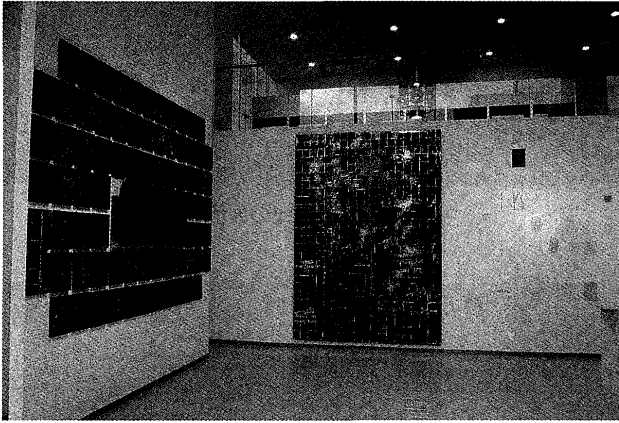


写真1 安藤文絵氏の展示風景

トレースして描かれた作品群とビデオを組み合わせたインスタレーション作品である。

大井敏恭氏(写真2)は、サンフランシスコと札幌を往来する作家である。異質なアートワールドを往来するからか、複合的なイメージが交錯する画面になっている。大井氏は、早い時期からこのグループ展の形成に賛同してくれて、理論面で多くの示唆を与えてくれる精神的支柱のような存在である。

小林麻美氏(写真3)は、第2回展から参加した。参加作家中最年少であるが、常に世界のアートワールドを見据えて、最先端の絵画作品に注目し、自身の映像的ビジョンを、自由な視点から、あるいは意外な方向から見せる作家である。

渋谷俊彦氏(写真4)は、前章でも述べたが、このグループ展づくりを発想したときに一番はじめに相談した作家である。筆者と同世代ということもあるが、多くの共通認識を持っていた。作品は、幾層にも重なる色彩表現の中に、とても繊細な隠喩を含んだ表現をする。元々は版表現的な印象が強かったが、今回、「絵画の場合」

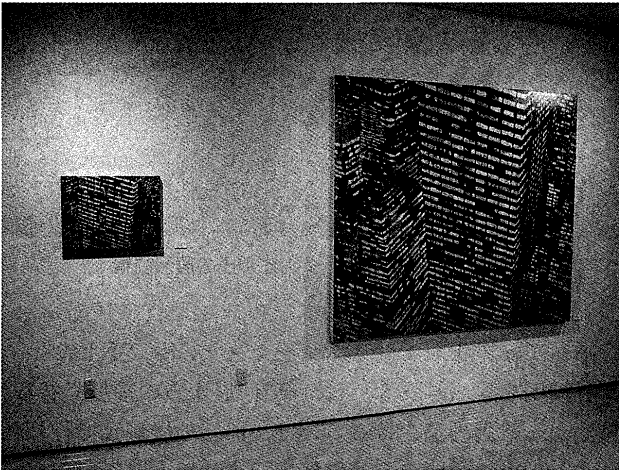


写真2 大井敏恭氏の展示風景

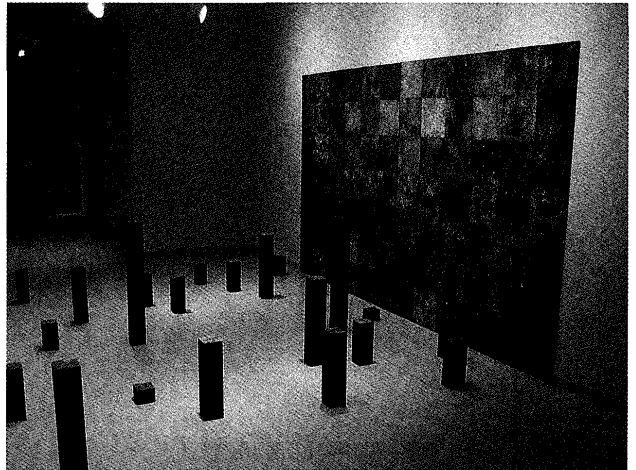


写真4 渋谷俊彦氏の展示風景



写真3 小林麻美氏の展示風景

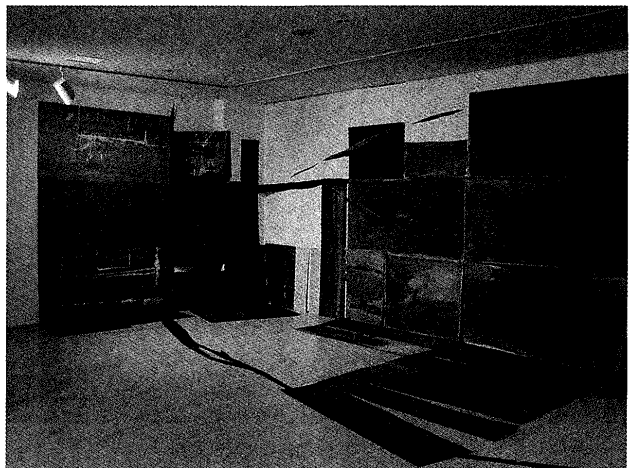


写真5 谷口明志氏の展示風景

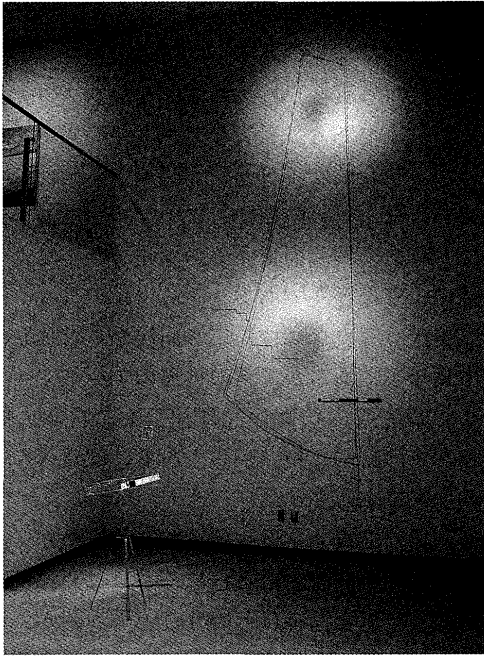


写真6 田畑卓也氏の展示風景



写真9 八子直子氏の展示風景



写真7 筆者の展示風景



写真10 レスリー・タナヒル氏の展示風景



写真8 久野志乃氏の展示風景

を通じて、表現がインスタレーションにシフトした。

谷口明志氏（写真5）は、第2回展からの参加である。確固たる絵画理論を持っていて、前回の展覧会で行われたネット上の議論では、穂積氏、小林氏と並んで積極的な発言をし、「絵画について考える」という目的を最大限活かそうとした作家である。四角い枠からは完全に遊離して、展示空間全体をキャンバスにして、有機的な形態をインスタレーションする。今回の作品は、本人も述べていたが、まるで洞窟壁画のような空間を作り出していた。

田畑卓也氏（写真6）は今回からの参加である。絵画の断片がちりばめられた額縁のような金属のフレーム状の形体とワイヤーで構成された作品は、絵画と、展示される「場」との関係性を問いかける。

筆者（写真7）も出品作家の1人であるが、ここでは梁井朗氏の文章を引用する。「林亨さんは、「グリーンバーグ以後」という問題におそらくメンバーの中で最もまともに向き合ってきているのではないかと思う。逆説的に言うならば、そのさまざまな問題に対して同時に対

策を発動しようとするために、画面は未解決の問いをはらんだままに、アンビバレンツさが魅力になって発光しているものになっているのではないか。(中略) 林さんの画面には、美術史が(あるいは、美術史をめぐる考察が)薄い層になって折り重なっているのだと思う。」^(註5)

久野志乃氏(写真8)は、今回からの参加である。最近、映像を使った作品や、パフォーマンス的な発表をしていたが、絵画へのこだわりは強いものがあるとみている。今回の作品は画面の中に窓のようなフレーム状の形を描いているものが多いが、二重の時間が漂うような世界がイメージできる。

八子直子氏(写真9)も今回からの参加である。子どもの顔が大きく描かれたシェイプトキャンバスはレリーフともいえる厚さがある。そこから派生するかのよう自然物のオブジェは、その子の日常からの発見を暗示しているかのようである。

レスリー・タナヒル氏(写真10)は、第1回展からのメンバーである。言葉(英文字)とそれに絡まる線や形が、混沌としたイメージを創るのだが、意外に静かな感じを受ける。今回は、切り抜いたキャンバスを貼り付けて、段差を付けた作品もあった。イメージの差異やズレを強調しているように見える。

IV. 関連イベントについて

1. オープニングイベント

(10月27日午後3時～約50名参加)

オープニングイベントでは、「近未来美術研究所」(これ以降「近美」と表記)によるパフォーマンスを実施した。「近美」は、テレビや東京のアートイベントにも出演する、2001年に札幌で結成された4人組の気鋭のアートパフォーマンス集団である。「七三分け」のヘアースタイルに白衣という奇抜な出で立ちで登場する彼らは、

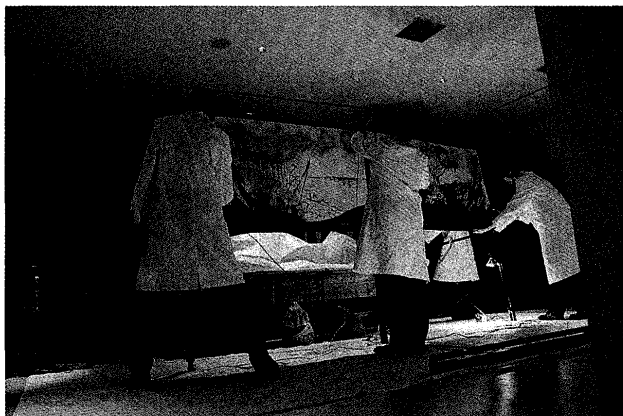


写真11 近代美術研究所のパフォーマンスの様子



写真12 近代美術研究所のパフォーマンスの様子

どこかユーモラスでアイロニーを醸し出す雰囲気を持っているが、そのコンセプトは至ってまじめであり深いものがある。ある時は社会問題や国際問題を取り上げたり、結成当時からいわゆる「核」問題を取り上げ、時事問題への関心を喚起する意図を持っていたようだ。

そのようなテーマ性のおもしろさはもとより、筆者が注目しているのは、彼らがパフォーマンスをするシチュエーション、つまり「場」と「関係性」についてである。基本的には、単独でいわゆる独演会としての発表が主なのだろうが、鑑賞者との双方向的なコミュニケーションを考えるだけでなく、その依頼者やパフォーマンスをする経緯や場所などを積極的に自分たちの表現に取り入れていく姿勢があるのだ。つまり、協同作業をするという意識が非常に強く感じられる点である。(写真11、12)

今回、メンバーとは、3ヶ月程前から、「絵画の場合」実行委員会の会議に出席してもらい、「絵画の場合」それ自体の性格や今回の展覧会の趣旨などについて話し合い、パフォーマンスとの関連性について綿密に打ち合わせをした。もちろん、この場でも、こちら側の意向を伝えそれに従ってもらうという関係ではなく、表現者として対等な立ち位置で協同作業をするという趣旨で臨んでもらった。実行委員会の会議は事務的な内容が多かったが、彼らは実に熱心に話し合いに参加してくれた。いくつかの主要な表現形態(ネタ)があるようだが、今回は、結成当初から行っていた「熱墨画」を中心にして構成する事にした。そして、「絵画」について考える展覧会という趣旨を汲んで、彼らなりのこだわりをどう組み込むかに相当の時間を費やしてくれた。「熱墨画」とは、業務用の大判の感熱紙(1m幅のロール紙)に、アイロンで絵を描くという、所謂ライブドローイングである。いつも多くの時間を割いて綿密に計画を立てる彼らが、今回こだわったのは、感熱紙の絵画表現をどう深めるかということだった。その答えの一つは、アイロンだ

けのドローイングではなく、アルコールを霧吹きで吹きかけるというものであった。これは、今回の「絵画の場合」のために絞り出した新アイテムであり、その効果は感熱紙とは思えない複雑で微妙な濃淡表現を生み出した。自分たちがやりたいことだけやったらお仕舞いというような、利那的な発想や態度が全く感じられないところに、彼らの大きな可能性を感じるのである。パフォーマンスは、オープニングパーティー最中におもむろに始まったが、すぐに人々の注意を集め、会場に一体感をもたらした。鑑賞者が彼らのパフォーマンスを通して、これまでとは違った角度から「絵画」を考える契機になったと確信している。

2. ワークショップ01「グラデーションプロジェクト」 (10月20日27日11月3日午後1時～2時30分、参加者総数45名)

筆者が実施したワークショップは、「グラデーションプロジェクト」と題して、主に絵画表現の中でも比較的広範な人たちに受け入れやすい「塗る」という行為に着目し、絵を描く楽しさを感じたり、新たな発見をしてほしいという意図の元に実施した。昨今のアートシーンではドローイングに注目が集まっているが、はっきりとしたかたちを表現しなくても、つまり、あまり描画能力が無くても、気軽に絵の醍醐味を味わえる方法を考えたわけである。内容は簡単にいってしまえば、「にじみ絵」を描き、展示するというものである。たっぷりと水で濡らした紙に、絵の具を垂らしたりこすったりしながら、絵の具が混ざり合ったり、かたちが変化していく様を楽しみながら作品を作ってもらった。(写真13,14)

さらに、制作者同士のつながりということも意識した。制作する紙は、あらかじめ事前に別な参加者に、画板に水張りテープで固定し、制作しやすい状態にしておいてもらう。制作したあとは、前の参加者が制作して乾燥が済んだ作品を壁に展示して、最後に次の参加者のた



写真14 ワークショップ (グラデーションプロジェクト) の様子

めに、紙を水張りして準備しておくという作業を連続して行ってもらうのである。

「にじみ」を使ったグラデーションを作る作業で、色やかたちの変化や偶然出来る「ぼかし」効果を楽しみ、心の投影やイメージの発露を感じてもらう。そして知らない他の人の作品を展示する緊張感を味わう。そうした一連の関わりの中から「絵画」の存在意義を考えてほしいかった。

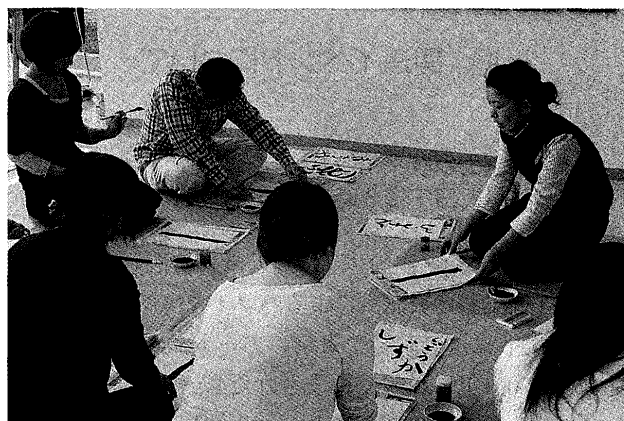


写真15 ワークショップ (ラインプロジェクト) の様子



写真13 ワークショップ (グラデーションプロジェクト) の様子



写真16 ワークショップ (ラインプロジェクト) の様子

3. ワークショップ02「ラインプロジェクト」 (11月3日午後1時～3時、参加者数14名)

参加作家である安藤文絵氏の実施したワークショップ「ラインプロジェクト」は、さらに鑑賞者との共同作業の要素が強いものであった。このワークショップは、展示作品のテーマと同じ、「一本の線を描く」という事を題材に企画されている。

ワークショップのはじまりは、左手で自分の名前をひらがなで書き逆さまにし、裏返して互いに見せ合い、その人の性格をあてて行く事からであった。そして、徐々にその時の気分、怒りや楽しいなどの感情を一本の線で表現する事を体験しながら、参加者の内にある表現力を開花させるプロセスをとっていく。最後に、展示されている作品と同じテーマ「一番大切な人」を題材として赤い一本の線を描き、その描いた線を、展示されているものと一緒に展示する事で終了した。これは、参加者が非体験者から観者そして表現者として完結するためのプロセスであると思える。(写真15,16)

安藤氏は「このワークショップは出品作品の根底にある、<人は何故表現するのか>という問いと繋がっているものであり、このワークショップがあってこそ出品作品が完結するものでもある。」と語っている。

4. ギャラリートーク (11月3日午後3時～5時、参加者数約60名)

出品作家のうち、サンフランシスコ在住のレスリー・タナヒル氏とアーティストインレジデンス^(注4)で台湾に滞在中の久野志乃氏を除く8名によるギャラリートーク(アーティストトーク)を実施した。これは、2004年展から継続的に実施しているもので、アーティスト(表現者)と鑑賞者が作品を鑑賞しながら、対面し、話し合いをするもので、絵画を媒介に人と人が直接的にコミュニケーションする場である。実施形態は様々なものがある

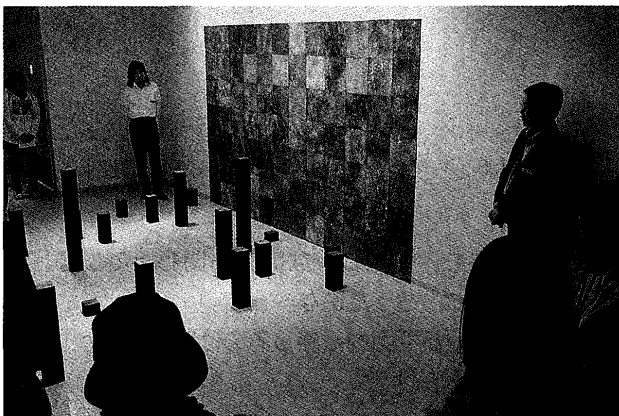


写真17 ギャラリートーク(渋谷俊彦氏)の様子

が、今回は、絵画の場合のメンバーである梁井氏とともに、ゲストコメンテーターとして、関口雄揮記念美術館に勤務する塚崎美歩氏にも参加してもらい、梁井氏と塚崎氏、そして作家の3人の対話を中心に進めるという形式をとった。それぞれの作家の思いや表現の意図を鑑賞者が理解する機会になったことは間違いないが、それと同時に作家自身が直接鑑賞者と話をし、さらに自身の作品について考えるということで、美術の社会性の重要さに気付かされる時でもあった。(写真17～20)

V. アンケート結果について(回収数91通)

1. 質問の意図

質問は、できるだけ項目を少なくし、回答しやすい設定を考えた。ポイントは二つである。一つは、アンケートに答えながら鑑賞者ができるだけ具体的な感想を持つようなものにしたかったという点と、アンケートに答えながら自動的に展覧会を総括するような視点を持ってもらえるような内容を考えた点である。いくつか紹介しながら、この展覧会がどのような受け止め方をされたか、また、主催者の意図がどのくらい伝わったか見てみることにする。まず質問項目は以下のようなものである。

設問1 鑑賞してみて、作品の感想と展覧会全体の感想をお聞かせ下さい。

設問2 この展覧会は、作品を制作しながら、あるいは見ながら「絵画について考える」ことを意図したものです。今、鑑賞されて「絵画」について考えたことがあればお聞かせ下さい。

設問1は、一般的な感想を尋ねる質問である。なるべく多くの人に気軽に答えてもらうことを意図した。設問2は、鑑賞者にこの展覧会の独自の目的についての感想を単刀直入に聞くものである。



写真18 ギャラリートーク(小林麻美氏)の様子

2. 特徴的な回答

まずは、今回の展覧会の開催主旨に全面的に賛同してくれているような回答を列挙する。

- 01「絵画の場合展には2回過去鑑賞しに来ていますが、この作家さんの新しいことへの挑戦が感じられて次もみたくになります。これからは是非続けて欲しいです。新しい作家さんが増えるのも良かったです。」
- 02「全体的な印象として、札幌の（北海道の）今の感覚のようなものを表現している展覧会だとおもいました。きれいめで、やわらかいとくなど・・・」
- 03「人が何を見て生活をしているのか、なにを思い描いていきているのかは、作る側にとって作品に浮き出るものの一部なのか、すべてなのか、作品の質感に出ているように思えました。」
- 04「作家さんそれぞれの個性が上手に展示に生かされているなという印象を受けました。久しぶりに面白い展覧会でした。」
- 05「見ごたえ（見るというより感じる・・・でしょうか）のある展覧会でした。ほんの少し（日常とは違う）特別な空間に（でも決して嫌ではなく不思議と心地よい空間）いるような気分になりました。時間がとてもゆっくりゆっくり流れているようでした。」
- 06「昨年も来ましたが今回もまた前回の作家さん、初めての作家さんといらっしゃいましたが、同じ作家さんでもまた作品の様子が変わっていたり、平面→立体を描いたり（渋谷さん等）おもしろかったです。ありがとうございました。」
- 07「とても印象深い物ばかりでした。秋を感じたり、温かさや寒さ等の温度も感じたりしました。いやしの空間ですね！！」
- 08「力作ぞろいですばらしい展覧会だと思います。勿論、過去の「絵画の場合」もよかったですと思いますが、個人的に今回が一番印象に残りました。」
- 09「ひとつひとつ展示方法が面白くて、とても勉強になりました。素材もいろいろで、何だろう何だろうと、考えながら見るのがとても楽しかったです。とても自由で、とても柔軟で、でもきちんと計算されたきれいな空間があるように感じて、とてもとても心地良かったです。たくさんの事を考えながら見させていただきました。ありがとうございました。とても素晴らしかったです。」

過去の本展覧会と比較して述べているものが少なからずあることがわかる。また、回答者自身が何か表現をしている人だと分かるものが多かったが、表現はしないが鑑賞することが好きだと伝わってくるような感想を述べてくれているようなものもあった。また、作家を特定し

て感想を書き込むものも多かった。

次に、批判的な意見やアドバイスの内容を含むものを挙げてみる。

- 10「作品はそれぞれ、良かったのも悪かったのもありました。展覧会としては、もう少し、グループ展としての相互作用があつて良かったと思います。」
- 11「3階に関して言えば、こういう距離感。こういう角度から、見たいなあというところから見せてもらえない位置に居ることが残念でしょうがない。例えば、渋谷さんは廊下をもっと狭くして両壁の作品をもっと視界に連続性を持って「引き」で見たかった。受付が逆にあつたら暗黙の順路も逆になり、麻美さんの作品もとてもいい離れ具合から見始めることができただろう。全体構成にもうちよい作戦というかジャッジが必

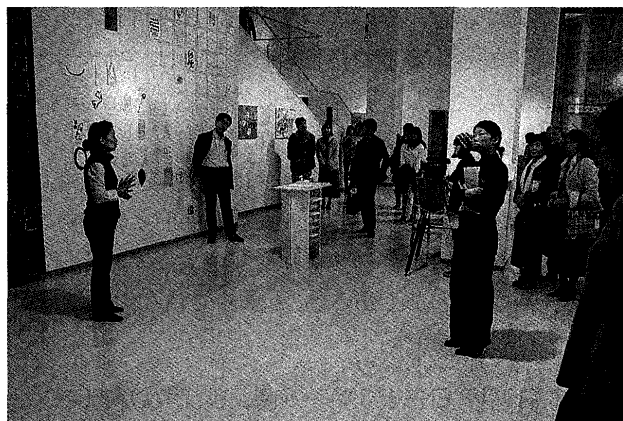


写真19 ギャラリートーク（安藤文絵氏）の様子



写真20 ギャラリートーク（ハ子直子氏）の様子

要だったかも。作家じゃない人も関わっている団体（？）だけに、もったいな～って。」

- 12「ギャラリーが平面的に感じるのは私だからかしら。使い勝手悪そう。」

10にある「相互作用」については、参加作家同士はお互い強い作用を感じていたが、必ずしも今回の作品に目

に見えるかたちで現れていないのだと思われる。11にある「ジャッジ」については、つまりは強力なキュレーションがあった方が、統一感が出ていいのではないかという批判と思われるが、第1回展から、あえてそのような方法をとらないできた。あくまで、参加者がそれぞれ展示全体を見渡し、それぞれの関係で展示を作っていくというスタンスをとっている。特定の意図の元に秩序を作っていくのではなく、各作家の作品を組み合わせる作業を中心としてきた。

続いて設問2に関する回答を見てみたい。こちらは、設問1と違って、「感じる」から「考える」質問になっている。この展覧会に興味持って観に来てくれた方の多くは、展覧会の趣旨を知っていると見ていたが、展覧会の趣旨自体に抵抗を感じる方が少なからずいたようだ。参加作家も注目した回答をいくつか紹介したい。

13「絵画は考えることを手を使って形にすることなのかなとおもいました。」

14「〈絵画〉の範囲はどこからどこまでなのかわからなくなりました。「絵画」と「立体」の境目はどこからなのでしょう。たとえばレリーフは「絵画」に含まれるのでしょうか。平面だから絵画、でこぼこしているから立体では区切られないですよね。しばらく悩みます。」

15「難しいなあ、意図しているのかなあ…。考えさせる間もなく、その瞬間なり、場所へ意識を導くのが絵画だと思っているので、いや、絵画に限らず。作品や人が作るものはすべてそうではないでしょうか」

16「絵画がどういうものなのかは分かりませんが、作者の方がどう思って描いたのかとか関係なく、見る人がこれはこうなるのかな、こんなふうを感じるなと思ってくれることは大切な事だと思います。作る人達は自分勝手にすきなものを一杯作って行けば良いんじゃないかと思えます。」

17「先日道展を始めて見る機会がありました。そこには多くの「絵画」がありました。私にとって「絵画」の読み方は、何らかのテキストを頭の中に想起させることです。テキストが想起しないものは「絵画」としての意味はなく、単なる「絵」のようなものです。大多数の「絵」に混じって数パーセントのものが私の足を止めさせます。それらは手法はバラバラでも、絵画の可能性を拓けようとする意思が感じられるものでした。一方で、その可能性を信じてしまったその作家さんの不幸を思うと、苦しくなってしまうました。」

18「大きさや配置を見ていると、平面にしてもインスタレーションにしても、見るというよりは体感するという感覚に近かった。平面というくり(制約)から少し飛び出しているようで面白かった。」

19「私自身、作品をつくり、その中でも特に「絵画」に分類されることが殆どですが、その意味についてもっと考えるべきか、否か、自己表現であるならば「思考」と「感性」の両立が必要だと考え、感じていたが、それが本当は大きな間違いである可能性もある。今一度、「絵画」について自分の中での定義を求めたいと思った。いい機会を与えてくださった展覧会です。ありがとうございました。」

設問の直接的な言い回しに戸惑っている感じもあるが、概ね率直な考えを述べているものが多い。

とくに作家として活動していると思われる方の回答で、展覧会主旨へ共感するような内容があると、とても勇気づけられた。

20「私自身、作品をつくり、その中でも特に「絵画」に分類されることが殆どですが、その意味についてもっと考えるべきか、否か、自己表現であるならば「思考」と「感性」の両立が必要だと考え、感じていたが、それが本当は大きな間違いである可能性もある。今一度、「絵画」について自分の中での定義を求めたいと思った。いい機会を与えてくださった展覧会です。ありがとうございました。」

21「『絵画』と言われると 白いキャンバスや画用紙に絵を描くというイメージが自分の中で一番に出てくるのだけれど、本当はもっと自由なんだな一と。描ける場所はもっとたくさんあって、表現できることは無限に広がっていて、もっと頭を柔らかくしなきゃと思わされた。もっと自分もがんばろう。」

22「絵にしか表現できないことというのはやっぱりあるんだなと再認識しました。普段、映像に関わってしまっていて、いまや何でも視覚化出来るわけですが、そういうことではない部分、絵画っていうものでしか、なしえない表現があるのですね。自分の考えている「絵画」というものが何かっていうと、それもまた難しくなっていくてしまうのですが。徐々にギャラリーに足を運びまして良い作品を見ることが出来ました。ありがとうございました。」

絵画表現の可能性や未来に対して楽観的な言葉も多くあり、この展覧会から何か自分のためになるようなことを得たとする回答も多くあった。

23「これからの絵画はどうなっていくのでしょうか。どんな時代になっても描くということは、無くならないと思っていますが、コンピューターの存在は大きいのですが、人間の手で生み出すものは、やはりステキ！」

24「絵を考えることを、作品として見せられると、ぴしっと背筋が伸びます。こういう展覧会がもっと増えてほしいです。」

予想よりは少なかったが、展覧会の趣旨そのものに対して、批判的な回答もいくつかあった。

25「意図としては下らない。もう少し、単純な美に立ち返るべきでは？」

26「『絵画』という枠で作品を鑑賞しません。」

27「あまり難しく考えない方がいいんじゃない？と思います。」

28「あまりむずかしいことを考えるのは苦手です。絵画（作品）は、作るものであり、そして見るものであるから、両者の対話（コミュニケーション）が出来ればいいと思っています。（見る人が理解できなければ意味がない）それで、私自身は、なるべく「見る人がわかりやすい」作品を作ろうと考えています。」

29「良い作品がある展覧会だと思いましたが、<絵画>については考えませんでした。カテゴライズ的なテーマは作品から感じられるものを制約してしまう恐れがあるのではないかと感じます。」

これらは、予想できた批判だが、謙虚に受け止めるのと同時に、真意を伝える難しさも感じた。しかしながら、美術の形式やジャンルを問うことには批判的な立場にあっても、対話をする事の大切さは共有できるとする回答であったことは、この展覧会の意図に矛盾しないものである。

回答数は91通あり、予想を超える多さであった。実は過去2回の展覧会でも同様のアンケートを行っているが、あまり回答数は多くはなかった。やはり3回目の展覧会ということで知名度が上がってきて、我々の意図も浸透してきたと見て良いのではないだろうか。

VI. ま と め

今回の展覧会は、前回までの展覧会のように、二つの目的（絵画について考える展覧会と絵画と社会の連動の試み）を明確に二つの内容に分けて実施するというより、作品発表を主としながらも、二つの目的を融合させたものにした。そうすることによって、「場」としての展覧会をより柔軟で浸透性の高いものにしたかったのだ。また、作家（表現者）がどのようにこの展覧会を活かし、その「場」で得られた経験を自身の作品にどう反映するのかがより鮮明になるのではないかと考えたのである。今後、今回の参加作家にヒアリングなどを実施し、深い論考への繋げていきたいと考えている。

運動体としての「絵画の場合」がどう機能したか。作家と鑑賞者をはじめとして、様々な立場の人間や組織、団体がどのようにつながって協同できたか。アンケート結果から判断しても、「絵画」を媒体として有効なコミュニケーションの「場」を作ることができたと考えて

いる。ワークショップとギャラリートーク等と合わせた、単なる作品展示の展覧会ではない、あらゆる要素が集まり繋がる「場」を作るという意図が、少しずつではあるが浸透してきていると実感した展覧会であった。

「絵画と社会との連動」について言えば、昨年、大井氏と堀田氏を中心となって「札幌アーティストギャラリー」というNPOを設立した。これは、社会へのつながりを求める意図を具現化するために、発展的に「絵画の場合」から分離独立したものである。

さらに、現在、絵画がオフィス空間（働く場）でどのような働きをするのかを考察するために、企業に対するアンケート調査や絵画作品のオフィス（働く場）へのデモ展示などを実施し、それらを元にした報告と分析を別稿にまとめる予定である。

最後に、本研究に多大な協力を頂いた、財団法人北海道文化財団および担当者柏谷祐氏、CAI現代芸術研究所及び主宰の端聡氏、カフェ・エスキス、ギャラリーミヤシタ、各後援団体、本学北方圏学術情報センター運営委員長小室晴陽教授、本学研究協力課およびポルトのスタッフに心よりの謝意を表したい。

付記

本研究は、平成19年度（2007年度）北翔大学北方圏学術情報センター研究費及び財団法人北海道文化財団まちの文化創造事業の助成を受けた。

展覧会の概要

■展覧会名：絵画の場合2007

■出品者：林亨、渋谷俊彦、レスリー・タナヒル、田畑卓也、安藤文絵、大井敏恭、久野志乃、八子直子、小林麻美、谷口明志

■全体会期：2007年10月18日（木）～11月18日（日）

■会場：ポルトギャラリー *全作家作品展示

10月20日（土）～11月11日（日）

カフェ・エスキス *渋谷俊彦氏個展

10月18日（木）～11月13日（火）

CAI現代芸術研究所 *田畑卓也、八子直子、レスリー・タナヒルの3氏作品展示

10月20日（土）～11月1日（木）

ギャラリーミヤシタ *林亨個展

10月31日（水）～11月18日（日）

■イベント（すべてポルトギャラリー）

・オープニングイベント・パフォーマンス

近未来美術研究所 10月27日（土）16：00～

・ワークショップ “gradation project”（林亨）

10月20日（土）27日（土）13：00～14：30

11月3日（土）14：30～15：30

- ・ワークショップ “a line project” (安藤文絵)
11月3日(土) 13:00~14:30
 - ・ギャラリートーク (出品作家による作品解説および
ディスカッション)
11月3日(土) 15:00~
- 主 催：絵画の場合実行委員会

北翔大学北方圏学術情報センター美術研究
プロジェクト

- 共 催：財団法人北海道文化財団
- 後 援：北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌
市教育委員会

注釈

^(注1) 2004年展「あまりに多様な技法様式が試みられ、まさに“ナンデモアリ”のアートの世界。その中で、あえて絵画で自分を表現しようという8人の展覧会を開催致します。それぞれの個性がせめぎあいながらも、統一感のある空間は非日常で心地よい緊張感に包まれるでしょう。また関連事業として、「美術と社会の連動」をテーマとした「絵画レンタル・プロジェクト」を実施いたします。」

2005年展「[メディアとしての展覧会/創造行為としての鑑賞] この展覧会は、単なる作品の発表会ではなく、絵画について考えるための「場」であることを志向しています。絵画はアートとして一見可能性が閉ざされているかのようにも見えますが、何よりも鑑賞者にとって最も身近な美術メディアとして私たちは強い愛着を持ってきました。本展はその残された可能性を追求するための場であり、メンバーそれぞれが作品を通じて、自身の絵画観の表明—いわば、絵画の本質と考えるものの具体化、あえて絵画から逸脱すること、絵画の数要素を拡大する事、絵画の実際性への着目など—を行い、これを通じて絵画の豊かさや可能性があきらかになることを強く願っています。そのために、このプロジェクトでは、議論とイベント(求心力と訴求力)という、二つの試みがなされています。」

2007年展「それでも絵画は制作され続ける。インスタ

レーションやビデオアートなど、美術の先端がますます多様化する21世紀にあっても、絵は描かれ続ける。わたしたちの「生」と相渉り、「美」の突端と切り結ぶために。「絵画の場合」は、札幌圏の10人の作家が展開する絵画の現在形のフィールド。作品は、あなたと対峙し、会話する日を待っている。」

^(注2) 浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第10号237頁から246頁に掲載の「美術と社会の連動の試み1—絵画の場合展における作品レンタルプロジェクト—林・堀田・大井」に詳しく報告済みである。

^(注3) 2007年1月9日(火)~20日(土)フランス語学校を併設するアリアンスフランセーズ内のギャラリーにおいて実施された小作品展。作家が各自のこだわる言葉を作品理解のヒントとして作品と並列して展示した。

^(注4) アーチストに「宿舎」と「創作の場」と「作品発表の場」を提供し、一定期間そこに滞在してもらって、創作活動を支援するもの。

^(注5) 2007年10月発行、絵画の場合2007の図録でもある『絵画の場合2004-2007』22頁に掲載。

Attempt of exhibition as < Venue > or < Artist Movement > "The Case of Painting" 2007 Report

Toru Hayashi (Northern Regions Research Center for Human Service Studies · Hokusho College)

Abstract

Until recently painting was the most widespread form of human artistic expression, but now visual expression is taking a great variety of different formats. As a result, it seems to me that the role of painting has diminished. "The Case of Painting" presented many meaningful examples of a re-thinking of the function of painting in order to redefine its role and to present new ideas to the public with the exhibition as a centerpiece, discussions about painting with participating artists, performances and workshops involving the viewer as well as gallery talks.

In order to assess the impact of "The Case of Painting" on those attending we requested that they fill out a questionnaire detailing their reactions. This report is an analysis drawn from their responses.

Keywords : Painting, Venue, Artist Movement, Exhibition, Viewer